

主日礼拝説教「本当に『神の子』」

日本基督教団石神井教会 2017年2月26日

【旧約聖書日課】イザヤ書 30章8～17節

- 8 今、行って、このことを彼らの前で、板に書き、書に記せ。
それを後の日のため、永遠の証しとせよ。
- 9 まことに、彼らは反逆の民であり、偽りの子ら、主の教えを聞こうとしない子らだ。
- 10 彼らは先見者に向かって、「見るな」と言い、預言者に向かって
「真実を我々に預言するな。滑らかな言葉を語り、惑わすことを預言せよ。」
- 11 道から離れ、行くべき道をそれ、
我々の前でイスラエルの聖なる方について語ることをやめよ」と言う。
- 12 それゆえ、イスラエルの聖なる方はこう言われる。
「お前たちは、この言葉を拒み、抑圧と不正に頼り、それを支えとしているゆえ
- 13 この罪は、お前たちにとって、高い城壁に破れが生じ、崩れ落ちるようなものだ。
崩壊は突然、そして瞬く間に臨む。
- 14 その崩壊の様は陶器師の壺が砕けるようだ。
容赦なく粉碎され、暖炉から火を取り、水槽から水をすくう破片も残らないようだ。」
- 15 まことに、イスラエルの聖なる方、わが主なる神は、こう言われた。
「お前たちは、立ち帰って静かにしているならば救われる。
安らかに信頼していることにこそ力がある」と。
しかし、お前たちはそれを望まなかった。
- 16 お前たちは言った。「そうしてはいられない、馬に乗って逃げよう」と。
それゆえ、お前たちは逃げなければならない。
また「速い馬に乗ろう」と言ったゆえに、あなたたちを追う者は速いであろう。
- 17 一人の威嚇によって、千人はもろともに逃れ、五人の威嚇によって、お前たちは逃れる。
残る者があっても、山頂の旗竿のように、丘の上の旗のようになる。

【福音書日課】マタイによる福音書 14章22～36節

²²それからすぐ、イエスは弟子たちを強いて舟に乗せ、向こう岸へ先に行かせ、その間に群衆を解散させられた。²³群衆を解散させてから、祈るためにひとり山にお登りになった。夕方になっても、ただひとりそこにおられた。²⁴ところが、舟は既に陸から何スタディオンか離れており、逆風のために波に悩まされていた。²⁵夜が明けるとき、イエスは湖の上を歩いて弟子たちのところに行かれた。²⁶弟子たちは、イエスが湖上を歩いておられるのを見て、「幽霊だ」と言っておびえ、恐怖のあまり叫び声をあげた。²⁷イエスはすぐ彼らに話しかけられた。「安心なさい。わたしだ。恐れることはない。」²⁸すると、ペトロが答えた。「主よ、あなたでしたら、わたしに命令して、水の上を歩いてそちらに行かせてください。」²⁹イエスが「来なさい」と言われたので、ペトロは舟から降りて水の上を歩き、イエスの方へ進んだ。³⁰しかし、強い風に気がついて怖くなり、沈みかけたので、「主よ、助けてください」と叫んだ。³¹イエスはすぐに手を伸ばして捕まえ、「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」と言われた。³²そして、二人が舟に乗り込むと、風は静まった。³³舟の中にいた人たちは、「本当に、あなたは神の子です」と言ってイエスを拝んだ。

³⁴こうして、一行は湖を渡り、ゲネサレトという土地に着いた。³⁵土地の人々は、イエスだと知って、付近にくまなく触れ回った。それで、人々は病人を皆イエスのところに連れて来て、³⁶その服のすそにでも触れさせてほしいと願った。触れた者は皆いやされた。

強いて舟に乗せ…

わたしたちの教会は、先主日、ゲスト説教者に元牧師・齋藤友紀雄師をお迎えして教会創立 59 周年の記念礼拝をささげました。特別に創立記念らしいことはあまりいたしませんでしたが、来年は 60 周年ですから、ぜひ皆さんで知恵を出し合って記念のときとしたいと願っています。そのときには、教会に連なる皆が集められることを願います。その集まってほしい人たちの中に、わたしたちは、どれだけの人のことを数え上げるでしょうか。教会員だけでしょうか。教会学校の子どもたちまででしょうか。皆さんのご家族は、その数に入っているでしょうか。皆さんの大切な友人は、その数に入れないのでしょうか。

信仰は、もちろん、家族であろうと、強いることはできません。小さな子どものうちならばともかく、首に縄を掛けて教会に連れて来るわけにはいかない。わたしたちも、ほとんどの者が今日ここに集まっているのは、だれかに強いられてではなく、一人ひとりの自分の意志によってでしょう。わたしたちは、今、自分が自分の自由な意志によって教会に来ている、と考えているからこそ、家族や友人を強いて教会に連れて来ることはできない、とも考えるのでしょうか。それは、もったもなことです。だれも、信仰のことで人を強いることはできないのです。

それは、確かなことです。ところが、わたしたちは、自分の信仰のことでだれに強いられたのでもない、自分自身の自由な意志で教会に来ているのだ、ということを確認なものにすればするほど、もう一つの確かなことに気づかされるようになるのです。このように自分の意志で教会に集まり、礼拝に加わっていると思っっているわたしたちは、しかし本当は、強いられてひとつの教会に集められ、強いられてひとつの礼拝にあずかるようにされているのだ、ということです。

福音書は、主イエスが**弟子たちを強いて舟に乗せ、向こう岸へ先に行かせた**、と言います。主イエスという方は、一人ひとりの人格を尊重してくださった方であったと思いますが、ご自分に従うように集められた弟子たちに対しては、必ずしも自由な意志で自己決定するようにはさせられませんでした。主イエスは、弟子たちを強いるのです。強いてひとつの舟に乗せ、ご自分の示した目的地に行かせようとなさるのです。

わたしたちは、なぜ、日曜日の朝、毎週毎週、ここに集まり、ひとつの礼拝にあずかっているのか。ときには、他の用事で休んだりしながら、否、何の用事もなくても休んでみたりしながら、それでも、再び、日曜日の朝、ここに集まり、ひとつの礼拝にあずかるようになるのは、なぜか。わたしたちを招き集められた方、主イエスが、そのように強いられるからです。わたしたちを洗礼によってキリストと堅く結びつけなされた神が、わたしたちをひとつの教会へとお集めになり、ひとつの礼拝にあずかるようにと、御手をお働かせになられているからです。

「さあ、あなたたちは、ひとつの舟、教会に乗り込みなさい。その舟に乗って、荒海を共に渡って、向こう岸の、わたしが示す目的地まで行きなさい。」それが、主イエスのご意志なのです。そのご意志を、わたしたちは、日曜日に教会に集められ、ひとつの礼拝にあずかるたびに、思い起こさせられる。わたしたちを、ひ

とつの舟、教会に乗るように強いられ、この舟に乗ってひとつの目的地に渡っていくことを、主イエスは、わたしたちに求められている。否むしろ、そのようにして進み行くことの幸いを、わたしたちにお教えくださっている。わたしたち自身が自分で選び取るようになる前に、主イエスは、わたしたちが選び取るべき道を、選び取るべき行く先を、お教えくださっているのです。

逆風に悩まされて

ですから、初代教会以来、舟は教会のシンボルとされてきたのです。主イエスに集められた弟子たちが、ときに主イエスと共に、ときに弟子たちだけで、乗るようにと命じられた「舟」。それが、「教会」を表すものとされてきました。

その舟に乗ることを通して、わたしたちは、多くのことを学ばされるのです。今日の福音書の物語で、弟子たちは、主イエスに強いられて舟に乗せられ、向こう岸に渡るようにと出発させられましたが、どういうわけか、このとき、主イエスは一緒に舟に乗り込まれなかったのです。弟子たちだけで、舟は目的地を目指さなければいけなくなった。

もちろん、このとき、主イエスは、弟子たちのことを放ったらかしになさったわけではなかったでしょう。主イエスは、ひとり山に登って祈っていたのです。そこは、湖の様子が見渡せるところだったのでしょうか。しかし、ときは夜ですから、実際に弟子たちの舟を見ることはできなかったでしょう。あるいは、一人山に登って祈られたというのは、主イエスが地上を離れて天の神のもとに昇られるときのことを弟子たちに学ばせるために、主イエスがあえてなされた状況設定だったのかもしれませんが。確かに、弟子たちの初代教会以来、わたしたちは、ひとりの人間として地上に立たれた主イエスを見ることはできない状況に置かれているのです。いずれにしても、弟子たちの舟からは離れた山の上において、主イエスは、祈っていらっしゃる。弟子たちのために、弟子たちの舟の旅のために。

弟子たちの舟は、主イエス抜きで、主イエスに示された目的地を目指さなければなりません。教会は、見える姿の指導者として主イエスがいらっしゃるなくても、主イエスに示された目的地を、目指さなければなりません。

わたしたちの主イエスは、舟の進ませ方を何から何まで逐一指図なさるお方ではありません。「あなたたちだけでやっごらん」とお任せくださるのです。ところが、そのようなときに限って、舟は逆風に悩まされるのです。いいえ、むしろ、主イエスは、そのようなときに、あえて、舟が逆風で悩まされるようになさっているのかもしれませんが。あえて、逆風に悩まされる経験をさせて、弟子たちが、この舟を目的地まで進めていくためには、どうすべきなのか、何を頼るべきなのか、何が不可欠なのか、そのことを学び取るように、悟るように、なされている。弟子たちの舟、わたしたちの営みに、逆風がもたらされるときというのは、そのようなときなのではないでしょうか。

「本当に、あなたは神の子です」

弟子たちは、逆風に悩まされる中で突然、湖の水の上に立たれた主イエスのお

姿を目の当たりにさせられます。主イエスは、確かに、弟子たちがどのような状況にあらうとも、究極的にはいつでも傍らにいてくださるお方なのです。

ところが、その主イエスのお姿に気づいた弟子たちは、はじめ、それが誰だかわからなかった。「舟」は自分たちにまかせられたと思っていましたから、そこに主イエスが現れるとは想定していなかったのでしょうか。ましてや、水の上に立たれる主イエスです。幽霊だと思ったというのも、分かります。

それにしても、主イエスは、いったい、どのようにして水の上に立たれていらしたのでしょうか。実は、明け方の暗がりでもよく見えなかったけれども、小舟が何かに乗っていらした、というようなタネがあるのでしょうか。本当のところはどうであったとしても、弟子たちは、そのときの出来事を、「主イエスが湖の上を歩いて来られた」と言い伝えたのです。そして、マタイ福音書は、そのとき、ペトロが主イエスのところまで水の上を歩いて行こうとして、途中で沈みかけたという逸話を、合わせて伝えたのです。

ペトロは、他の幾人かの弟子と同様、この湖で漁を生業としていた男です。荒れた湖で危険な目に逢ったこともあったに違いありません。舟から水の中に落ちたくらいで、慌てふためいて助けを求めるほど、やわな漁師ではなかったでしょう。実際、ある場面では、漁の途中で舟から湖に飛び込んで陸まで泳いでいったということが伝えられています。そのペトロが、主イエスのもとまで行こうとして、水の中に沈みかけ、「**主よ、助けてください**」と叫んでいる。

そう、この出来事を伝えているのは、ペトロをはじめとする弟子たちが、このとき、主イエスこそ、自分たちを水の中から引き上げてくださる命の主なのだ、そのことに気づかされたということなのではないでしょうか。だからこそ、この福音書は、主イエスがペトロを引き上げて弟子たちの舟に乗り込んだときに、そこにいた者たちが、「**本当に、あなたは神の子です**」と告白しないではいられなかったと、伝えているのでしょうか。その主イエスの傍らにはペトロがいるのです。

実は、ペトロだけでなく、他の弟子たちも皆、主イエスによって水の中から引き上げてもらうべき者たちなのでしょう。主イエスによって水の中から引き上げてもらって、主イエスに抱かれながら舟に乗り込み、その舟の中で主イエスと共に「**本当に、あなたは神の子です**」と呼んでもらうのです。それは、洗礼によって水の中から引き上げられたわたしたちキリスト者のことでもあるのです。

今週の水曜日から、受難節の期節に入ります。主のご復活を祝うイースターに洗礼にあずかる者の、備えの期節でもあります。あの、湖の向こう岸に行くようにと命じられた弟子たちのように、備えられた舟に共に乗り込み、新しく示される目的地を目指して、わたしたちの旅を始めるときです。この船旅の途上で、わたしたちは、水の上にお立ちになれる主イエスと相見えるのです。主イエスは、ご自分のもとへと進み出て来ようとする者を、水の中から引き上げてくださるでしょう。わたしたちは、そのことを、洗礼のしるしを通して、確かめるのです。この営みに、わたしたちは、招かれてきました。この営みを、主は、わたしたちに強いるのです。しかし、これこそは、わたしたちに強いられた恵みなのです。